

避難所でおにぎりを配る子どもたち (提供=慈愛園、4月18日)



### 熊本地震

# “支え合い”知った

## 養護施設の子ら避難所で活動

熊本市の(福)慈愛園(内村公春理事長)が運営する児童養護施設の子どもたちは、4月に熊本地震が起きてから、避難所でボランティアを行った。18日から地域の小学校に避難する住民に物資を配給。困りごとの聞き取りもし、多くの人に「ありがとう」と声を掛けられたという。そうした体験で生まれた子どもたちの気持ちの変化とは。

(鮫島隆紘)

児童養護施設「慈愛園子供ホーム」には、2歳から高校生まで70人ほどが暮らす。14日、16日の地震後は、全園子が敷地内の運動場に避難し、毛布にくるまひながら一夜を明かすことになった。幸いにも慈愛園の建物に大きな損傷はなく

最初に物資を送ってきたのは、現在は沖縄で料理人をしている20代男性。17日から2回に分け、カップ麺450食を送ってきた。また同じく20代女性がツイッターで慈愛園の状況を訴えたところ、全国から食材や紙オムツなどが届いた。結局、匿名も含めて、物資の提供は100件を超えるほどになった。

「今、地域には地震で十分に食べ物がない人もいる。我々を心配して物資を送ってくれた先輩方には感謝してほしい。こういう時だからこそ、我々ができることをやろう」。

この呼び掛けに約半数の子どもたちが応じた。市内の学校が休校だったこともあり、18日から地域の避難所で

「テレビも特番ばかりでつまらない」など不満の声が聞こえてきた。そこで、緒方園長は18日朝、全員を運動場に集めてこう話した。

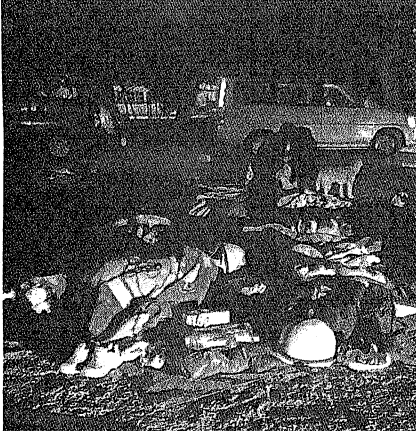
「生理用品がほしい」「ラジオで情報がほしい」などの声が集まり、解決に向けて

また中1男子は、物資を届けた際、皆が「ありがとう」と笑顔だったことが忘れられず、「日頃できない体験をして、人の役に立つことがどんなにいいことか分かった」と感じた。

「飯はこれだけなの」「テレビも特番ばかりでつまらない」など不満の声が聞こえてきた。そこで、緒方園長は18日朝、全員を運動場に集めてこう話した。

さらに、避難者一人ひとりを回り、何か困ったことがないか聞き取りも実施。「夜は寒い」「生理用品がほしい」「ラジオで情報がほしい」などの声が集まり、解決に向けて

「人間同士が支え合って生きる重大さを知った。これから自信を持ち、いろいろな活動へ積極的に参加したい」と意欲を示す。さらに中2女子は、子どもからお年寄りまで多くの人に感謝された。」「人間同士が支え合って生きる重大さを知った。これから自信を持ち、いろいろな活動へ積極的に参加したい」と意欲を示す。



慈愛園の運動場で毛布にくるまり一夜を過ごす子どもたち (提供=慈愛園、4月16日未明)

ある小学校で活動を開始した。

活動は、地震直後でお湯、おにぎり、みそ汁などを直接手渡したという。

「最初は不安そうなお子もいたが、そのうち態度も変わった。日頃見せられない子どもの潜在能力の高さを見せつけられた」と話した。

「人間同士が支え合って生きる重大さを知った。これから自信を持ち、いろいろな活動へ積極的に参加したい」と意欲を示す。